

対談

渡邊順生氏
国本静三師

マリアを奏でる

清らかさと、あでやかさと、
光り輝く美しさ

モンテヴェルディの音楽

国本 第四十二回サントリー音楽
賞受賞、おめでとうございます。
その受賞記念公演でモンテヴェル
ディの「聖母マリアの晩課」(通称…
聖母マリアの夕べの祈り*)を演奏さ
れるそうですね。

渡邊 この作品は、バロック時代
の宗教音楽の中で最も人気のある
曲の一つで、欧米では頻繁に演奏

公益財団法人サントリー芸術財団が日本の洋楽の振興を目的として設立した
「サントリー音楽賞」(旧・鳥井音楽賞)は、

一九六九年の設立以来毎年、洋楽文化の発展に顕著な功績のあった個人、
または団体に贈られてきた。

その第四十二回(二〇一〇年度)の受賞者が、
チェンバロ、フォルテピアノ奏者、古楽指揮者として活躍される渡邊順生氏である。
来る七月十七日には受賞を記念して

モンテヴェルディの代表作「聖母マリアの夕べの祈り」の演奏会を行う渡邊氏と、
本紙連載「音楽サロン」でおなじみの国本静三神父が語る、
音楽における聖母マリアの魅力とは。



*聖母マリアの夕べの祈り

反宗教改革の一つの側面、つまりカトリックの反撃とも言うべき華麗さが全面に出ている「聖母マリアの晩課」は、バロックになりきれないルネサンスの香りも残しつつ、かなり柔軟な様式による楽曲を13曲で構成した長大な作品となっている。

全体としてモンテヴェルディの最初のオペラ「オルフェオ」(1607)の経験が余すことなく生かされ、特にことばの意味を生かす斬新な書法であったレチタティーヴォ様式を教会音楽、しかも典礼音楽に用いた興味深い例である。全体に感じるスペクタクル感は、まるで万華鏡を見るようである。

各楽曲の編成は第7曲を中心にして、対称 symmetry を形成するように構成されている。またモンテヴェルディはこの作品を現代の記譜法ではなく、ルネサンスに中心的に用いられた白符定量記譜法によって記譜していることも大いに留意すべき点であろう。この点においてはルネサンス音楽そのものであると言える。(国本神父HP「音楽サロン」より)

会で取り上げられ、数多くのCDがリリースされています。ところが、日本では相当以前から古楽演奏が盛んであるにもかかわらず、この作品の演奏を生で体験した人はほんのわずかに過ぎません。

私がこの曲の生演奏に初めて触れたのは一九七四年だったと思います。そのころの世界の音楽界では、人気があるバロック音楽作品は、ヘンデルの「メサイア」だった。それを「聖母マリアの夕べの祈り」が追い越した。今は多くの国でモンテヴェルディの「聖母マリアの夕べの祈り」は非常にポピュラーな作品となっているのに、なぜか日本人にはなじみが薄い。

今回、鍵盤奏者である私がサントリー音楽賞受賞記念の演奏会をするのですから、チェンバロかフォルテピアノの曲という選択肢もありました。ですが「聖母マリアの夕べの祈り」に対する日本の状況を考えると、私は鍵盤奏者である前に古楽器の演奏家として、ともかく、何とんでもこの曲を促めたいという気持ちで演奏を決めました。

国本 渡邊さんは以前からモンテヴェルディに傾倒していらつしやいますね。渡邊さんにとってモンテヴェルディの音楽家としての位置づけはどのようなものになりますか。



●渡邊順生（わたなべ・よしお）

1950年神奈川県生まれ。73年、一橋大学卒業と同時にオランダ留学、アムステルダム音楽院にてチェンバロをグスタフ・レオンハルトに師事。その後ヨーロッパ各地で演奏活動を行い、80年に帰国。古楽器演奏の啓蒙と普及に努め、演奏活動、CDのリリース、著作活動など幅広く活躍中。上野学園大学客員教授、国立音楽大学、桐朋学園大学、東京音楽大学講師。

渡邊 私がモンテヴェルディに入れ込んだ理由は、私たちにとつての音楽の原点に彼が存在するということです。

私たちは、音楽は人間の喜怒哀楽を表

現するものだと子どものときから教えられてきた。それが近代音楽への理解でしょう。しかし、音楽の歴史の初めからそうだったのかというと、例えばルネサンス以前の教会音楽は、必ずしもそういうものであったとは言いません。

一四五〇年ごろからの百五十年間がいわゆるルネサンス音楽の時代と言われていますが、一六〇〇年ごろ、イタリアで人間の喜怒哀楽をドラマチックに表現する「オペラ」が誕生します。音楽の近代派、ここから始まったと言ってもいいわけで、その新しい時代をリードしたのがモンテヴェルディだったのです。

音楽の変革期に、モンテヴェルディは神に祈りをささげる宗



教音楽でも、人間ドラマを中心に描くオペラでも、基本的に同じスタンスで作曲してゆきます。

バロック音楽の時代には西洋音楽史最大の天才が二人、登場します。この時代の扉を開けはなったのがモンテヴェルディであり、締めくくったのがバッハでしたね。

国本 おっしゃるとおりですね。でも私は、教会音楽、例えばグレゴリオ聖歌であっても、その根本には人間が感動できないものは神さまも喜ばないだろうという視点があると思います。

人間が一生懸命、模索する、賛美する、感謝する、それが形になって神さまが喜んでくださる。芸



●国本静三（くにもと・せいぞう）
京都教区司祭。1940年京都府生まれ。67年司祭叙階。
上智大学文学部・神学部卒。東京音楽大学作曲専攻卒・
研究科修了。教皇庁立音楽院（ローマ）研修。主要作
品に管弦楽曲“Garden of KYOTO”（1980年マニラ初
演）、オルガン曲“The Sound of Peace”（1981年広
島初演）等がある。

術活動にはすべてこの思いがある
のではないでしょうか。

これは人間中心ということでは
ないので誤解を招かないようにし
なければなりません。モンテヴ
エルデイはそういう感性が優れて
いたのかもしれない。

**運命の星に導かれて作ら
れた「聖母マリアの夕べ
の祈り」**

渡邊 「聖母マリアの夕べの祈り」
は、モンテヴエルデイがマントヴ
アという小さな公国で宮廷楽長を
務めていたときに作曲され、一六
一〇年に出版されて就職活動も念

頭に置いてローマ教皇に献呈した
ものです。

しかし当時のローマが簡素を尊
んでいたのに対し、この作品は圧
倒的に華麗なヴェネツィア風の様
式で書かれています。ローマ教皇
の期にいまするがありません。

国本 モンテヴエルデイも、この
曲では無理だとわかっていたので
しょうね。このとき彼はもうひと
つ「聖母マリアのミサ曲」を作っ
て、晩課とミサ、二つを組み合わ
せてローマに持って行きます。

ミサ曲のほうはトリエント公会
議以降の流れに沿ってカトリック
側の反省点を示す、簡素なア・カ
ペラ様式です。このミサならロー

ママでも気に入られる
のではないかと期待
していたようですが、
ローマでの職は得ら
れず、その二年後に
は何とマントヴァで
も失業してしまふ。

そのあたりのこと
は今月号の私の音楽
サロンをお読みいた
だければわかります
が、不思議なことに、
結局彼はヴェネツィ
アに招かれることに
なりますね。

渡邊 ヴェネツィア
のサン・マルコ大聖
堂では、一六一三年
に新しい音楽監督を

募集しました。これに応募した
モンテヴェルディは、その採用
試験でこのときとばかりに「聖
母マリアの夕べの祈り」を演奏
したに違いありません。

モンテヴェルディはヴェネツ
ィアとは何も接点がない時期に、
ヴェネツィアのイメージにぴつ
たりの光り輝くようなこの曲を
作っていたのです。これは運命



の星に導かれて作った曲としか考
えられませんね。

国本 「聖母マリアの晩課」の楽
譜は「聖母マリアのミサ」と一組
の合本にして一六一〇年にヴェネ
ツィアで出版されています。

扉にはラテン語で「クラウディ
オ・モンテヴェルディの最新作、
つまり6声部の『聖マリアのミサ
曲』は教会合唱団向きであり、多

声部からなる『聖マリアの晩課』は聖歌隊によつて聖堂やとりわけサロンで演奏しても適するものである」（国本訳）という当時の教皇パウロ五世の推薦文も記されています。

サロンの演奏会にお勧めというのは、この曲の特徴をみごとに言い当てていますね。

渡邊 この晩課とはどのようなものですか。

国本 晩課 (vespere) は聖務日課の中の一つで、夕べの時間に唱えられ、一日の恵みに感謝する祈りです。聖務日課とは夜明けの前から日没まで、かつては一日に八回（現在は五回、観想修道会などでは七回）時間を決めて行う祈りのことです。

現在は司祭・修道者ばかりでなく広く信徒にも勧められる教会の公式の祈りとなり、日本では「教会の祈り」、晩課は「晩の祈り」という語が当てられてい



ます。

カトリック教会では、中心になる聖餐式をミサといい、これはキリストが決めた最後の晩餐の記念で教会の原秘跡です。聖務日課はそのミサとは根本的に異なるものですが、ミサと聖務日課はともに教会における双璧と叫ぶべき重要な祈りであり、典礼です。

渡邊 その晩課をサロンで演奏してもいいと、当時の教皇が勧めているのですか？

国本 確かに、教皇が晩課をサロンで歌っていいと勧めるのは、あまり考えられないことです。この推薦文も教皇自身が書いたのではなく、モンテヴェルデイ自身が書いたものと思われませぬ。

マリアの魅力は、頭で理解するのではなく心でとらえる

国本 渡邊先生がモンテヴェルデイを一言で表すとしたら、どのような言葉になりますか？

私だったら、情念、でしょうか。そういう人物が作った祈りの音楽はすごいです。情感に欠ける人の宗教音楽作品は実は退屈で、何の魅力もないでしょう。

渡邊先生は、演奏の際にモンテヴェルデイの音楽のパワーを感じられることはありますか？

渡邊 私はキリスト教の信者ではないのですが、それでもすごく感じます。

そもそも、賛美や祈りはメロデ

ィーに乗せたほうが、言葉で唱えるより表現が豊かになるでしょう。やはり音楽の力はすごいです。

特にこの「聖母マリアの夕べの祈り」はね、何と言ったらいいのだろう、言葉が見つからないのですが……、美しくもあでやかな音楽を演奏している気分になりますね。それがバッハの「口短調ミサ」を演奏していると、このような感じは浮かんでこないのです。

国本 イエスを扱った作品は、あでやかな表現は取り得ない。マリアだからこそ、人間的で豊かな表現ができるのでしょうか。

マリアは女性に対するいろいろな思いが全部集約され、その上で女性を超越してしまったような存在なのかもしれません。

渡邊 だから多くの音楽家がこぞって表現しようとしたのでしょうね。「マニフィカト」然り、「スターバト・マーテル」然り、「アヴェ・

マリア」然り、マリアを讃え、歌う音楽は多く作られているし、それは教会音楽だけでなく、民謡や世俗曲まで広がりがありますよね。**国本** イエスは受肉した神さまで、

マリアはあくまで人間です。三位

一体の中に入るイエスと聖マリアとは大きな区別があります。

そしてマリアは人間として、救い主を育て守ります。そういう労をいとわなかった。そこに何かえも言われぬやさしさと強さがあります。

マリアは、女性の理想像を見いだすことができると同時に、この方に仕えたいというような、こちらの騎士道精神をもかき立てる要素を合わせもっている方です。

渡邊 そうですね。マリアはイエスでは表現しきれないものを表す力がある。

マリアを奏で、聴くときには音楽的な要素を超えたプラスアルファの素晴らしさを感じることがあります。マリアは表現の幅がとても広くて、きらびやかな中でも質素で、清楚な輝きを保ち続けることができるのです。

イエスの十字架や復活という信仰がないと近寄りがたいのですが、マリアは信仰をもっている人でももっていない人でも入りやすい。それがマリアの魅力でしょう。**国本** 絵画でもルネサンスやバロック時代のマリアは母性あふれる

女性としても描かれますし、特にバロックではより人間的魅力をもったマリアが描かれています。それでも清楚で清いマリアのイメージは保たれるのですから、それはマリア像のすごいところですよ。

渡邊 絵画などを注文するときは自分が描いてほしいと思う雰囲気をお願いすることはできるので。か。例えば、うちのマリアさまはイングリット・パークマン風に、とか。(笑)

国本 マリアの名画も、実際の女性をモデルしたものはたくさんあります。それがゆるされたのですね、マリアは。メルル・ストリープをモデルにしたら、フランドル絵画のようなイメージのマリアになるかもしれませんよ。

マリアの魅力は頭で理解するのではなく、心でとらえるものなのでしょう。だからこそ、すべての人の拠りどころになる方だと思いますね。

日本人はバロック音楽が大好きで、マリアも大好きだから、モンテヴェルディの「聖母マリアの晩課」ももつと受容されると思うんですがね。

渡邊

曲名が「晩課」だと日本人にはどんな音楽か見当もつかないし、興味がわからないのかもしれない。これは翻訳の難しさでもあるのですが、そこで今ではオペラの題名みたいだけれど「聖母マリアの夕べの祈り」が多く使われています。

国本

でもこれは単なる「夕べの

祈り」ではないですね。原題は「最も聖なる乙女の晩課」です。私は晩課にこだわりたいんですが……。でも、まず広く聴いてみたいと思ってもらわないと始まりませんしね。

七月の演奏会がひとつのきっかけとなることを、心より願っています。